

## 第二百八十九話 提灯行列と戦争画

慶事に際し、祝意を表するために、火を灯した提灯を持って夜間街路を練り歩く提灯行列は、一幅の絵巻物である。戦間期には日本軍の大勝利を祝って各地で盛大に行われた。

また、国民の戦意高揚のために、従軍画家が現地に赴いて戦闘風景などを描いた一連の絵画を戦争（記録）画が人気を博した。画家の鬼気迫る画力に驚嘆する。

### ○提灯行列

#### 1 提灯行列の起源

提灯行列の原型は、1860（万延1）年に幕府使節が米国フィラデルフィアを訪れた際の花火を持った市民3000人の市中歓迎行進に由来するとされる。また、1873（明治6）年「開成学校」「医学校」が教頭の誕生日を祝って提灯行列を行ったとされる。更には、欽定憲法発布の夜東大の学生、職員が揃って炬火を持って市中行進し宮城前広場前まで行ったとの例もある。（本当の炬火は火事の危険があるとのことでこれ以降は提灯行列となったという。）或いは、1900（明治33）年皇太子の御成婚に際しての慶應義塾の炬火行列や帝大・一高学生の提灯行列が行われた事例もある。

何れを起源とするか確定的ではないが、何れにしても米国のトーチライト・プロセッションに倣ってカンテラあるいは提灯を使うことを考案したもののようである。

#### 2 戦勝を祝しての提灯行列

日清戦争や日露戦争の戦勝を祝っての提灯行列、大東亜戦争では、南京陥落、シンガポール陥落時等の提灯行列がネット検索では見受けられる。全国的に何を祝い何時どれ位の規模で行われたのか等の全体像を示す資料は残念ながら見つけれなかった。

#### 3 今も残る提灯行列

提灯行列というと戦争に結びつけられる傾向にあるが、その本来の趣旨は祝意を表することであり、今でも各地の行事・祭りとして残っている。

皇太子の御成婚を祝っての提灯行列も小規模ながらも行われている。

### ○戦争画



日本では大東亜戦争間積極的に戦争画を活用した。従軍画家スケッチ展を開催したり、従軍画家協会を設立し、また絵画展をも開催した。朝日新聞が深く関わったとされる。1945年4月には「戦争記録画展」が開催され、各種戦争美術展の入場者数は、戦時下の最盛期において官展の10倍に達したとも言われる。

戦後、1946年にGHQが軍国主義を象徴するものとして153点の「戦争記録画」を接収しアメリカに運ばれたが、1970年に日本に無期限貸与という形で返還され、現在東京国立近代美術館に保管されている。

#### 著名な画家と画題

- ・藤田嗣治 アッツ島玉砕（1943）、サイパン島同胞臣節を全うす（1945）
- ・宮本三郎 山下、パーシバル両司令官会見図（1942）ニコルソン付近の激戦（1942）
- ・小磯良平 娘子関を征く（1941）、南京中華門の戦跡（1939）
- ・中村研一 コタ・バル（1942）、マレー沖海戦（1942）
- ・小早川秋聲 国の楯（1944）
- ・松本竣介 立てる像（1942）
- ・鶴田吾郎 神兵パレンバンに降下す（1942）

他に猪熊弦一郎、伊原宇三郎、川端龍子、田村孝之助、福田豊四郎、向井潤吉、山口蓬春、吉岡堅二等錚々たる画家が従軍した。

（了）